の希望と決意

◇あけましておめでとうございます。
◇新たな希望と決意をもって、新春を迎えたことと存じます。
◇「広報よこごし」を発行してからはじめての正月を迎えました。
◇その間、広く村民のみなさんから愛読されているところでありますが、今後も広報技術を高め、斬新な広報紙にしたいと努力する所存であります
◇さて、輝く一九七三年を迎えるにあたって、村民各層から新年の所感を公募してまいりました。
◇幸いにして、多数の投稿をいただきました。
◇厚くお礼申し上げます。

楽しい老後の生活を送りたい

木津　今井　芳美

うんと楽しい事は、仲々忘れられない。好きな旅行を有志と日帰りしただけ、珍宝を求めたとか、ボロイ金儲けもない儲に終った。所で星の廻り、芽の出ない時是は誰にもある様だ。こんな親爺にも応報がやって来たのかも知れない。公民館の高令者大学へ欠席者の代理として、入校を許され、月々に多大の感動を身に付けた。例えば名士の講義（其の時々に変る）楽焼きの実習、体操の効果、見学旅行、更に良かった事は、各部落の方々との顔見知りと親睦で有った。永く親交を続けたい。参拝旅行は、永年懸案の所へも行って来た。三十年前から疎遠を続けた小学の母校へも訪問する。小学校百年記念誌にも卒業写真が載る。植樹祭の影響も有って趣味で育てた庭木が良く売れた。家族も皆健康、さて今年は、家族の健康は勿論、幸い、秋には菩提寺円通寺に授戒が有るので、私も就き、家庭の仏もみんな一緒に就けて、現幽共に安泰で過したい。

20年ぶりにラジオ体操

小杉　遠藤　妙子

絶好の秋日和に恵まれた楽しい村民運動会が想い出されます。今年こそはと思い、子ども達を連れ参加しました。二十年余りもラジオ体操などしない私の身体がコキ、コキと音がする程一生懸命に体操をやり、大人も、子供も、一心になって走り、跳び、笑い、そして踊るなど、本当に楽しかった事が、つい昨日のように思われます。

私達農村女性は、生活とのたたかいで家事や、子供の世話と、それに農閑期には町へ出稼ぎにと、近所との交際もうすれて居り、ユーモア的な「うるおい」すらない生活は何処も共通した姿でしょうか。年年に専業農家の意識がなくなる様な現況にある。この様な時に、ふっと思い出すのが楽しい運動会の事です。今年も、より多くの人達が参加して楽しい一日を過せたら幸いだと思います。

青年会で多くの仲間を得た

小杉　小舟戸洋子

仕事をし始めた頃の事、職場と家との往復で何か物足りなさを感じていた時、青年会に入らないかと進められ、入会して一年半余り、現在に至った。青年会という言葉を聞くと、古くさい、酒ばかり飲んでいると思っている人もいるかもしれないが、これから村を背負って立とうとする十代、二十代の青年たち、男女を問わず青年会という組織の中で、若者は、若者なりの言葉で語り合い、人生を考えている。又、キャンプに行ったり、スポーツをしたりして、活動もして来た。その中で、目についたのは、年々減少しつゝある女子団員、私はとても残念に思う。これまで青年会に入って何を得たかと聞かれても、村の青年と気軽に挨拶ができ、自分を振返って見る機会が多くなり、友達が多くできたとしか言えないけれど、私は、良かったと思っている。

最後に私は思う、一つの事が失敗しても成功しても、後で後悔しても満足してもこれから精一杯生きて行きたい。

村民大運動会

喜びをわかちあってくれた母校の百周年記念

二本木　仲村スイ子

以前から話のもちあがっていた小学校統合がいよいよ本決まりになったようである。我母校である木津小も百年の長い歴史を閉じようとしている。小学校を統合することはこの村の益になるからであろうが、懐かしい思い出のつまった母校が消えてしまうのはやはり寂しい。

中学校の卒業式の日、そして、高校入試を突破した日、喜びをわかちあってくれた母校の方々、その有難さは今、こうした時に胸を熱くする。

考えてみれば、この年、悪戦苦闘の末やっとこぎつけた高校進学、中卒で社会に出ていく友が妙におとなに見えて我身を見つめなおさせられたあの頃、こんなふうな冷静な気持になれようとは、露も思わなかった。新潟市内の雑踏にもまれて、初めて横越という「オラガ村」に誇りがもてたせいであろう。

勉強と体育を第一に

沢海小三年　清野秀夫

ぼくは、去年はよい年でした。どうしてよい年だというと、勉強もよくできたし、いっぱいどこかの町、村へ行ったからです。もし去年がわるい年だったら、ぼくは、反省します。でも去年がよい年だったから、ぼくは、心の中でよい年だったなと、思っています。

ぼくは、今年もよい年だとよいです。どんなことがあるとよいかというと、勉強がよくできて、体育もよくできればよいです。

本をすらすら読んだり、かけ算わり算を正しくしたり、後ろまわりを百回されるようにがんばります。

新しい未来を期待しよう

沢海　別所　朝子

風が雨戸を震わせている。生まれて何回目かの十二月が今年もやってきました。知らぬまに月日はすぎていく。

つきることのないこの時の中で私は、今また、一年を見送ろうとしています。

まだ、社会へ飛び出したばかりの私にとって、世間という風に帆をはれない船のようにさまよい、うろたえた一年であったように思います。

あれも、これも、自分にできそうなのは何でもやってみたいという好奇心と助けてくれる人のいない寂しさが今まだ心の中に同居しています。

一年前も、そして、その前の年もそうであったように、来年こそは、すばらしい年にしたいと思うのです。しかしそのすばらしい年とはどういうものでしょうか。学生にとって受験に合格することが、女性にとって幸福な結婚をすることが、己の夢を果たそうとすることが、すなわち、すばらしい年につながるのでしょうか。自分というものがなぜ

（三頁の上段右に続く）

明るく合理的な結婚式は公民館で——

正月早々、酒の宣伝ではないが、日本人にとって、酒は心のふるさとみたいなもの。

うれしいとのみ、悲しいとのみ、年中行事にもかかせないものである。

酒は日本全国およそ、三千八百の酒造会社があるといわれている。酒は日本の風土の中で、みがきこまれた伝統の味で、きれいな水と米と気候とによって、きめこまかな味（甘、辛、渋、苦、酸の五味）がつくりだされるものである。

酒といえば、灘の生一本とか伏見の酒が有名であるが、新潟の酒も減法うまいと評判で、西の灘にしのぐ味である。

それは、日本一の穀倉地帯をひかえ、おいしい越後米と豊富のトぜ源された清水、そして、伝統ある越後杜氏の技術とによってできたもので、まさに、日本一といわざるを得ない。

しかし、心配なことは昨今のテレビ、新聞でにぎわしている公害問題で大気や河川の汚染で伝統の味を楽しむことができなくなるのではないかということである。

「酒は、のめのめ、のむならば……」と酒にまつわるエピソードや珍談奇談は沢山あるが、飲酒運転だけは、絶対にしないようにしたいものである。